10月12日の授業へのコメントと回答

今昔物語集を聞いていると「女って怖ェ!!」とか言っておきながら、「女の持つ裏の怖さとあいまった魅力・・・やっぱいいよね・・・」と言ってるように思えます。二項対立は時としてくるっと入れ替わるように言っておられましたが、自分にはどちらかというと、お互いに影響を与えあう作用／反作用のもののように思えます。「ぞっとする」時というのは、自分の知らない未知のものに会ったときの感覚のように思いますので。こっけいさも「おかしい」と思うことは一種の慣れから来ていると思いますので、その三極が関連しあっている（フレミングの左手が浮かびます）状態のような感覚があります。

私も「怖いのが魅力」というのが基本だと思います。「怖いほど美しい」という美女の描写もよく見ます。（逆に「美しいほど怖い」と言わないのはなぜでしょう）。二項対立としての美と恐怖（あるいは醜さ）を超えたところに、授業のテーマがあるので、それがどのようなあり方をしているかは、これからの授業で皆さんも考えて下さい。作用と反作用というとらえ方もいいですね。皆さんの感想で多く見られたのが、スライドを見ているうちに、何がエロスで何がグロテスクかわからなくなったというのでした。それが前回の授業の目的なので、私としては満足のゆく感想でした。

女羅刹がなぜまず誘惑して夫とするのかが気になります。習性だからとか、食料を切らさないためとか、お話だからとかいろいろ考えられるけれど、じつは彼女らにとってこれが「愛」なのではとか考えてしまう。ただ食べるだけなら、もっとよい方法がありそうだし。そして、新たな男が来ると、前の男を食べることで、出会いから愛をはぐくみ、そして実ったものを食べることで、その愛を実る、もしくは自分と一体化、取り込みをするみたいな。昔、すごく好きでしかたがなくて、いろいろあって最終的に腹を割いて、内臓味わって終わり、というBADエンドのゲームがあったけれど、自分では一番好きなエンディングでした。自分の中にある目をそむけたくなるような感情を習慣とし、外面にそれが表れるのが女羅刹であり、習慣ではないし、外面に現れないけど、内包しているのが人であり、それをはねつけるのが「悟り」なのだろうか。

たしかに女羅刹の側から見ると、この物語はまったく異なる様相を示すかもしれませんね。ひたむきな「愛」のなせるわざだったというのは、私はまったく思いつきませんでした。この授業のテーマは、男性と女性で相当の違いが出てくるかもしれません。私自身の偏った見方がいくつか修正されそうです（もちろん、本人は偏っているつもりはないのですが）。

『西遊記』の中に書かれた「女児国」のことを思い出した。女夜叉と羅刹女とは違って、女児国の女の子たちは、みんな本当に美しくて、純情なのです。この国には「子母河」という川があって、女児国の女の子と成年になると、この川の水を飲んで子を産む。「男」はこの場合、まったく必要ないものとなったのだ。唐・玄奘を原型とする唐僧は、美麗で高貴な女国王に魅了され、彼女と両思い、婚姻を結ぼうとしたが、やはり、結局、インドへ仏教経典を求めるという大義に負けて天竺へ赴いた。

『西遊記』の物語は、私はまったく知らなかったので、興味深く思いました。教科書も授業も、インドや日本のことは取り上げるのですが、中国は欠落しています。文化史的に見ても、中国はインドと日本の媒体となったところなので、知らなければならないのですが・・・・。中国関係で気がついたことがあれば、いろいろご指摘ください。子を産むときに男がまったく必要がないというモチーフは、萩尾望都の漫画の『マージナル』というのにあるのを思い出しました。

女性に言いくるめられて男性が力を失うという話は、古今東西多くあるが、この話では「美」というものが根底にあるように思われる。恐ろしい女性というと、日本では「山姥」も人を食べる鬼であるが、山姥が超人的な力で人を襲うのに対し、この話の夜叉は美しさで男の心を奪って飼い殺しにしてしまうのが、ちょっと現実的だと思う。中国では傾国の美女がたびたび登場するが、似たようなことが世界各地であったのかもしれない。「今昔」の後日譚も少しそれっぽい感じがする。ちょっと違うかもしれないが、「生と死」というとイザナギとイザナミの話を思い出す。やっぱり振り返ってはいけないパターン。

「山姥」は私も教科書を書くときに取り上げようかと思っていました。結局、うま使えなかったので、教科書には登場しませんが、「食わず女房」の形式の場合、はじめは美女で登場するので、ぴったりなのです。雪女もそうですね。中国の女性については、昔、以下の本を読んで、すごいなぁと思いました。漢の呂后や清の西太后などにとくに強烈な印象を受けました。

村松 暎 1968『中国烈女伝：三千年の歴史のなかで』中公新書。

イザナギとイザナミは教科書の第1章で取り上げています。今回の授業で登場する予定です。

今日の授業では美と怖（醜）と滑稽という三要素の連関を提示されましたが、滑稽については、客観的な視点が強く影響しているのではないでしょうか。今日、例に出されたガネーシャや地獄絵は、その聖性、恐ろしさに心をとらわれている間（それを信じる土地、時代）は、美や怖を感じますが、あくまで客観的に見た場合に、滑稽の要素が出てくるのだと思います。いわゆる、今日、妖怪と呼ばれる存在が、時代が下るにつれて、滑稽さを増していくのは、ここに関係があるのではないでしょうか。

たしかに、一歩、引き下がって対象を見ると、滑稽感がありますね。私は美しいものや恐ろしいもの、醜いものをどんどんエスカレートさせると、どこかで滑稽に転じるという見方を示しましたが、必ずしもそうばかりではないようですね。

今日の講義中で「食べること」についておっしゃっていたので、ふと「我が子を食らうサトゥルヌス」を思い出しました。あれは、こどもをおそれた王が息子を食べるという設定だったと思うのですが、とても恐ろしく、でもつい見入ってしまう絵でした。やはり「人を食べる」といのは東西関係ない不思議なテーマな気がします。

「我が子を食らうサトゥルヌス」については、ほかにもあげてくれた方がいます（次のコメント参照）。「愛すること」と「食べること」は、そのままエロスとグロテスクあるいは生と死の表裏一体の関係につながると思い、強調しました。教科書の第7章に登場する「絞め殺しの木」という事例でも、このことが示されます。

「食」と「性」の関連はとても興味深いと思います。以前、脳の中の食欲をつかさどる部分と、性欲をつかさどる部分はとても近いところにあって、それぞれの刺激が関連していると聞いたことがあります。絵画の主題では美女と死体ということで、ユディトの他にサロメも思い浮かびました。滑稽なグロテスクというと、中世の「死の舞踏」の版画のイメージがあります。また、「裸のマヤ」を描いた画家と、「子を食らうサトゥルヌス」の画家が同じと知ったときは少し驚きました。

脳科学から見た「食」と「性」についてはも、他に指摘してくれた人がいました。わたしも調べてみます。サロメは、全回のスライドにはありませんでしたが、ヨーロッパ美術における重要な女性のイメージだと思います。そのような視点からの研究もいろいろあります。「死の舞踏」は、今回の配付資料にある小池寿子さんの著作が詳しいです。

雲馬前生物語で女性の味って出てきたのがすごいなって思いました。味って、食べるのか、なめるのか・・・。仏教だと女性のが罪が深かったりして、女性がおとしめられている感じがします。スライドおもしろかったです。やせた女体は何だか硬そうでした。

私はジャータカの中に出てくる「味」については、ほとんど気がつかなかったのですが、たしかに何なのでしょうね（後出のコメントの中にも同じ疑問があります）。なめるぐらいが普通かと思いますが・・・。仏教が「男性の宗教」であることは、間違いありません。そのため、女性から見た仏教や、仏教のフェミニズム的研究などもあるのですが、この授業ではそういう路線はあまり取りません。理不尽であることはときどき強調しますが（とくに戒律の時）。やせた女体はエゴンシーレですね。ほかにもムンクを出してもいいかと思いました。モディリアーニもこの系列でしょう。ルーベンスやルノワールとは対極ですね。

「エロス」という語自体をどう定義づけたらよいのかわからないが、たとえば、女性の秘部が見えそうで見えないとき、エロスだなと感じる。一方で、あまりに秘部が鮮明に映し出されると、グロテスクだなと感じる。映し出されるものが同じであっても「想像の余地がある」ものがエロスとつながり、現実的なものがグロテスクとつながるのかなという気がした。そうすると、現世はグロテスクなものと考えるべきだろうか。

「想像の余地がある」かどうかで、エロスかグロテスクかになるというのは、たしかに多くの場合そのとおりだと思います。しかし、それがつねに当てはまるかというと、必ずしもそうではないようです。たとえば、インドのヒンドゥー教寺院では、カジュラホのように（教科書第２章参照）、あからさまな性行為が現れますが、グロテスクな感じはしません。それに対し、日本の春画は、多くの人にグロテスクという印象を与えます（前回はそのような作例は避けました）。しかし、江戸時代の人々にとってはエロスそのものだったはずですし、海外でもそのようなものとしてひろく知られていました。「想像の余地」だけでは、このふたつは分けられないようです。

ジャータカの最初の方で、「女性というものは、実に、・・・自分の意に従わせる」とありましたが、その中にひとつの「味」とは何でしょうか？　人間なんて皆、塩味のような気がしますが・・・。たぶん、私の知識不足ですね。グロテスクな絵で、死んだり、傷ついたりしている人間から、ほとんど血が出ていないのが気になりました。体に傷がつけば血が出るのがあたりまえなだけに、出血の少ない首を切断された人物などは気味が悪いと思いました。

血についての指摘は、他にはありませんでしたが、鋭いですね。血は生命力の根源であり、とくに女性の性のイメージと密接に関係していると思います。血については私もあまり意識していませんでしたが、これからの授業でも気がついたことがあれば、指摘して下さい。

ジャータカや今昔物語集で語られる内容は、すべて男性視点で、美術作品も男性が理想とする女性像のようになっていて、すべて男性のフィルターがかかった内容なので、女性から見て違和感を感じる要素が多々ありました。

すでに述べたことのくりかえしになりますが、そのとおりだと思います。美術も宗教も、歴史的に見ても、基本的には男性が支配していましたし、この授業の担当教員、つまり私も男性なので、どうしてもそのようなとらえ方になってしまいます。ぜひ、女性から見た「エロスとグロテスク」をいろいろ指摘して下さい。

スライドショーで、着衣の女性像と裸体の女性像の写真がおもしろかったです。講義室の中も、写真を撮ってみるとおもしろいかもしれませんね。感想文を書く女学生と、食い入るように鑑賞する男子学生の図が撮れそうです。

なかなか、おもしろいコメントでした。あの写真は、9月に何必館（かひつかん）という京都の小さなギャラリーでやっていた、Elliott Erwittの写真展で購入した図録が出典です。撮影者のElliott Erwittについては、ほとんど知りませんでしたが、MAGNUMで活躍していたようで、いくつかの写真は見たことがありましたが、その全体像を見たのは初めてで、なかなかよかったです。

10月19日の授業へのコメントと回答

楊柳観音など仏教の樹下美人図が、キリスト教の聖母子像とたいへんよく似ているのに驚きました。吉祥天の持つざくろも聖母子像と共通であり、衣装の色も同じような気がしました。西洋美術では、聖母の衣装の色に様々な意味を持たせているようですが、仏教の影響があるのでしょうか?

仏教の直接の影響はないでしょう。マリアの衣装の外側が緑、内側が赤というのは、キリスト教の図像学ではいろいろ解釈されると思いますが、そこに仏教的な要素は認められません。ただし、マリア信仰というのは、ヨーロッパにおける地母神信仰の流れを汲んでいるので、大地や豊穣神としての女神が当然あります。キリストを抱いたマリアと、赤子を抱いた鬼子母神は、起源をさかのぼると同じところに行き着くかもしれません。マリア信仰にも「黒マリア」のように、通常の慈母とは異なる恐ろしい女神のイメージもあるようです。神話研究もあまり大風呂敷になると、全部もとは同じとなってしまうのですが。

女性が植物と描かれることが多いという話でしたが、その植物というのは花よりも樹なんですね。ヤクシニーの例のように、樹が男性だとすると、力強いイメージですが、日本の美人図姿は、竹や柳などしなやかで女性的な雰囲気があり、女性を表しているという方がしっくりくるような気がしました。それから、アダムとイヴの話ですが、神が恐れたのは「永遠に生きること」ではなく、「“善悪を知ってしまった人”が永遠に生きること」なのではないのかなと思いました。生命の樹から遠ざけて、代わりに産む機能を与えるというのはおもしろいです。神は人にそれほど愛着があったのでしょうか。

「花よりも樹」というのは、私はあまり意識していなかったのですが、そのとおりですね。インドでは植物神と言えば、樹木神と言い換え可能なようで、もともと樹木をイメージしているようです。花も重要なのですが、草花よりも、樹木に生えている花がまず連想されます。日本の「花鳥風月」の「花」とは、根本的に違うようです。旧約に見られる2種類の樹と永遠の生命というのは、授業でも問題提起しただけですが、おもしろい問題だと思います。キリスト教では、これまで十分議論されてきているのでしょうが、神話学ではどのようにとらえられているのか、興味を覚えます。前回紹介した図版の中に、樹木をはさんでふた組の男女が立っていて、片方がアダムとイブ、もう片方がマリアとキリストでした。15秒だけだったので、あまり記憶に残っていないと思いますが、この授業の「生と死」や「男と女」「善と悪」のような枠組みを象徴的に表す作品です。キリスト教については、このあとはほとんど登場しませんが、西洋史やヨーロッパの諸言語を専門とする方でキリスト教に詳しい人は、そこからのコメントも加えてください。

中国の古典詩詞では、「柳」はよく使うモチーフです。常に「離情」の象徴として、夫婦・恋人、もしくは友人たちは、その一人が遠いところに行って二人がやむなくわかれた時、送別の詩詞の中に使います。もう一つの場合では、遊女はよく「柳」を使って、自分の運命をたとえて表します。誰でも柳の枝を用意に随意に引っ張って折っていいからです。

中国の柳については、前回の授業のあとに、受講生の方から直接コメントをお聞きすることもでき、「別離」と密接な関係があることを教えていただきました。私はまったく知らなかったので、興味深かったです。日本の場合、やはり中国の文化の影響は絶大なものがあり、仏教関係の図像でもインドと直接結びつけるよりも、いったん、中国で受容されて、

それがさらに日本にという2段階を設定すべきなのでしょう。運命についても同様で、インドの樹下美人図の図像では、およそ現れない考え方だと思います。柳の下の幽霊も、このような別離や運命と結びついたイメージなのかもしれません。インドにはないことです。

樹木にからみつく構図を見ていて、そういえばキリスト教絵画の「原罪」のシーンでも蛇が樹にからみついて描かれるのを思い出しました。“からみつく”図は、いやらしさ? エロス? とか、誘惑を思わせる共通性が西洋・東洋問わずあり、正の方向にとらえたのがインドのヤクシニー、負にとらえたのが「原罪」なのかな、と思いました。(右)手を上げ、足をクロスさせるのは、ウエスト・腰・足首を強調し、女性の“女性らしい美”を魅せるポージングというだけではないのですね。魅力といえば、日本での“女性の美”ってどこなんでしょう? 胸も見せず、腰も足も見せず・・・。この間、Aさんと話し合いましたが、結論は出ませんでした・・・。

たしかに、エロスの問題は、女性美の問題と大きくかかわりますね。本来は男性もエロスと結びついてもいいはずなのですが、東洋でも西洋でもほとんど取り上げられません。キリスト教美術ではせいぜい聖セバスティアンの殉教シーンくらいでしょうか。話はずれるかもしれませんが、「男装の麗人」というのも、しばしば好んで取り上げられるイメージです。ジャンヌダルクに代表されますが、美女が男性の姿を装うというのも、魅力的なのでしょう(現代の日本では宝塚とか)。女性の美しさは、女性美を強調するだけではなく、性の境界を逸脱したり、すりかえたりすることでも生まれるようです。この問題は教科書執筆の時にも気になっていたのですが、ほとんど取り上げることができませんでした。

仏像や仏教絵画を鑑賞するのは好きなのですが、どんな仏様なのかという事ばかりに頭がいっていました。普賢菩薩像の七支の話、大変面白かったです。近代日本美術で描かれていたものが独自に生まれたものではなく、中国や中央アジアの美術の影響を受けていたのは驚きでした。しかし、(詳しい事はわかりませんが)信仰の対象とされていたはずの楊柳観音が、なぜ春画とまではいかなくとも、性的な要素を持つ美人画へとなったのか、その発想の転換が理解できませんでした。(なぜ非世俗的な仏教美術が俗っぽい絵画へと変容したのか・・・)

仏像や仏画は、それだけ見ていても楽しめるのですが、背景や意味を考えると、さらに何倍も楽しめます(宗教美術なので、楽しむだけではいけないのでしょうが)。普賢菩薩の乗っている象について、展覧会の時のエピソードをお話ししましたが、このようなときに、展覧会に行った甲斐があることをしみじみと感じます。まわりから見れば、象ばかりじっと見ている変な観客に見えるでしょうが。日本の美人画は私の専門ではもちろんないのですが、研究テーマとしてとても魅力的です。一般に江戸時代の絵画を研究するためには、当時の文化人のきわめて高い知的水準を知る必要があります。古今東西のさまざまな文化(文学、芸術、演劇、宗教などなど)にかんする素養がなければ、何もわからないまま終わってしまいます。「見立て」などはその代表です。もともと日本の文化は、和歌の世界などでも同様ですが、いかにさりげなく、さまざまな意味をそこに折り込めるかに、しのぎを削ったところがあります。美人画に仏教美術の影を読み取ることなど、その初歩的なところでしょう。

どこでもはじめには男と女がいるのですね。イザナギとイザナミは対等な生まれなのに旧約聖書ではそうではないのが“差”なのだと思いました。感想を読んで色々と考えさせられました。ザクロはペルセポネーを思い出されました。あれも豊穣の神ですよね。旧約にも木が出てきて、しかもその木は生命と知恵の木であり、イヴと関係しているのは初めて知りました。女性と木のイメージがあるのですね、ここにも。エデンになぜ蛇がいて、しかもイヴを誘った

のでしょうか？　生命を生み出すものが同時に死をも生み出すのは、ペルセポネーがハーデスの妻となったことと連想されました。

イザナギとイザナミも、本来は同等の神であったと思いますし、むしろ、イザナミの方に重きが置かれていたような気配すらありますが、現在の古事記などでは、イザナギを優位に置こうとする部分が見られます（今回、配付資料で確認します）。ペルセポネーについては、教科書を書いたときは意識していませんでしたが、たしかに樹神や鬼子母神などと関係が顕著ですね。カギとなる植物がザクロであることや、冥界との関係、大地の女神デメーテルが母親であることなど、似すぎとさえ言えそうです。ギリシア神話の神々との関係は、インドのヤクシャやヤクシニーとバッカス神との間でも見られます。

怖いと美しいの関係で思ったのですが、世阿弥が怖さと「面白き」を対立させ、「幽玄」の美しさはまた次元がちがうものというようなことを言ってました。怖さも幽玄の中にはさむと、「面白き」になるそうなので、人間が感じる何かが怖いなのか美しいなのかは固まったものではないのかと思いました。『養老』の能に楊柳観音菩薩が登場するのですが、若返りの水や初夏のイメージと重なる気がしました。

能との関係からのコメント、ありがとうございます。「幽玄さ」は仏教美術だけではほとんど問題にならないのですが、能が介在すると、重要な要素となるのでしょうね。能の「面白き」は滑稽とはまた違うのでしょうね。幽玄を介して怖さと面白さが移行するというのも興味深いです。人間の無意識や深層心理に直接働きかけるものとして、未分化の何かがあるのでしょうか。楊柳観音が水と関係が深いのは、中国や朝鮮半島で楊柳観音が流行したときにも顕著です。楊柳観音は別名、水月観音とも呼ばれ、水の中の小さな陸地（補陀洛山を表すようです）に描かれます。水と結びつくことと、観音が女性化することが、何らかの関係を持つのではと考えています。

10月26日の授業へのコメントと回答

女性を差別しているように感じられる部分は多大にあると思う。しかしそれは男性が女性に対して畏怖の念を持っているからではないだろうか。多くの部分で男性は女性に勝てない部分がある。痛みに耐える力、男とは比べものにもならないくらい血に対する耐性があるはずである。女性が男性に代わって戦争を行った場合にはもっと残酷なものになると考えてしまう。このように男性は女性に劣る部分が多くあり、畏れを持つために差別的に扱ってしまうのだと思った。

そうですね。男性も女性も、それぞれ相手を理解できないので、おそれをいだくと思いますし、それだから惹かれあうのでしょう。女性が痛みに耐える力が強いというのは、私も昔、渡辺淳一のエッセイで読んだことがあります。本当かどうかはわかりませんが、ひろくそのように言われているのかもしれません。戦争を行ったとき云々は、どうかなと思います。私自身は、アグレッシブになるのは性によるよりも、やはり後天的なものかと思います。「戦争を行うのはいつも男」というフレーズもよく見ますが、それは歴史において、権力を握ったのが圧倒的に男だったからではないでしょうか。かなり前になりますが、イギリスの首相だったサッチャーが、フォークランド紛争でアルゼンチンと戦争をしたことがあります。

女性を植物に例えるのが万国共通なのが面白い。なぜそうなるのか分かるような分からないような、多分自分が女だから客観視できないのもあると思うけれど、何もないところから人一人を作り出す女性は、男性に比べて自然的であるように見えるのかもしれない。むしろ無から有を作るというのは超自然でもあり、だからこそ、現実を超えるために死が必要なのかなぁとか。全然関係ないかもしれませんが、美人薄命とか色々あるけれど、男女問わず美しい人には悲劇がよく似合うのも、正反対なものを内包するがゆえの魅力なのかもしれない。

女性と植物の結びつきは、第1章のテーマでもあり、さまざまな文化に広がりを持ちます。女性が子どもを産むのは、胎内（体内）に異物を作り出し、それを成長させて、外界に出すという、考えてみればすごいことをしているのですね。生物学的には、女性が基本にあり、男性はそのサポート役でしかないようです。まぁ、おまけみたいなものですね。体のつくりも、種の保存を担う女性の方がしっかりしているので、寿命も長いようです。女性が自然、男性が文化というような分け方もありますが、これも男性視点からのとらえ方でしょう。無から有を作ることである誕生（出産）を、死と対比させるのは、よい指摘だと思います。生と死のような反対物を一致させることも、宗教学では好まれます。

イザナミや大宣津比売神が鼻や口や尻などから何かを生み出すということにすごく衝撃を受け、きもちわるいなと思いました。イザナミはなぜ火の神々を最後に生まなかったのでしょうか。火を生めば危ないことは分かりそうな気がするんですが・・・。あと、ブッダの話を読むといつも思うのですが、ブッダは女性に全く興味がない、むしろ性欲的なものを嫌悪しているかのようなのに、息子がいるのはなぜでしょうか。その上、その息子にラーフラなどという名前をつけるなんて無責任だし勝手だなと思います。

気持ち悪いのが、人を惹き付けるのでしょう。これが昂じると性的倒錯とかスカトロジーとかになります。イザナギが火の神を生んで死ぬのは、いろいろ解釈可能と思います。死をもたらすためには、火を登場させるしかなかったのかもしれません。古代の人にとって、火はわれわれよりもはるかに恐ろしく、また、いたるところにあるものです。インドでは体の

中にもあると考えられていましたし、水の姿を取るという神話もあります。火が命を持っているとか、命そのものという発想もあります。釈迦とラーフラの関係は難しいですね。父と子の葛藤ということになると、エディプス・コンプレックスのような話になります（仏教版だと、阿闍世王コンプレックスというのもあります）。

お釈迦様とその周りにいる美女たち・・・男性が女性の美とグロテスクの両面をとらえていて、男性が女性に感じている感情は、近づきたいが近づきすぎると恐ろしい、そんな感覚なのかなと思いました。多くの男性も女性にそのように感じているのかと思うと、男女の相手への見方は普遍的なのかもと思います。そんなに男女とは対極的な関係なのかと、ちょっと不思議です。

当たり前の答えですが、人によるでしょうね。文献では徹底して、女性への嫌悪感をもった釈迦という設定になっていますが、図像作品では必ずしもそのように見えないことを、前回は紹介しました。私はテキストと作例の関係に興味を持つことが多いので、そのような視点になりましたが、他にもいろいろ可能かと思います。

『古事記』の黄泉訪問で、「行きには何の描写もないのに、帰りには黄泉比良坂が突然登場するのは不自然だ」という意見を読んだことがあります。確か、前半と後半でイザナミの死のイメージがいきなりふつう→グロテスクと変わるので、成立年代がちがうのでは? という説だったと思いますが。首がなく、胸に顔のある魔物は『山海経』で見たことがあります。日本では、中世近世には、僧侶は死体のケガレを嫌って、死体には三昧聖などに任せきりだったのですが、仏教ではそもそも「死体」はどのような扱いをされているのでしょうか。

イザナギの黄泉の国訪問譚は、神話学でもよく取り上げられるので、成立過程も含めてさまざまな説があるのでしょう。ギリシャ神話のオルフェウスの物語とも酷似しています。『山海経』はおもしろいですね。てもとにあった平凡社ライブラリー版を見ましたが、第七海外西経にでてくる形天（ぎょうてん）がそれでしょうか。『山海経』によると、帝に首を切られて、乳を目に、へそを口にされたとあります。前回のマーラの図像との影響関係はわかりませんが、このような存在はアジア各地に広く見られるようです。仏教と死のケガレについては、重要かつ難しい問題です。日本人のケガレ観を論じるときに、仏教が死者供養（葬儀や法事）に関わるようになったことはもっとも注目すべき点でしょう（残念ながら、私は明確な答えを持っていませんが）。ただし、僧侶がまったく葬儀と関わりがなかったということはないでしょう。朝廷や貴族の葬儀には有力な寺院や僧侶が関わったと思いますし、土砂加持のような一種の死者儀礼も密教では行われました。

美からグロテスクへの変化が、「死者のごとく」といったように「死」によってあらわされていることは、『ブッダチャリタ』にも見えるし、イザナミのくだりでもあったことだが、もともとから美しければ美しいほど、グロテスクへ変化したときにインパクトがあると思う。死体にうじがたかるというので思い出したが、九相図なんかも、やっぱりそういう効果をねらって美女を題材にしているのではと思った。

九相詩絵巻は、以前から授業でもときどき取り上げる素材で、この授業でも機会があれば紹介したいと思います。じつは教科書を書いたときも、九相詩絵巻に地獄絵や六道絵と組み合わせて、ひとつの章があったのですが、全体が長すぎたため、編集の人と相談して割愛しました。スケジュールにもよりますが、それを復活させようかと思っています。これらの作品はいずれも、単にグロテスクなだけではなく、そこには性的な視点がかいま見えます。

「マグハヒ」が目を合わせることで、性交を表すときいて、昔の貴族が、男性の呼びかけに女性が返事をしたら結婚となる、ということに近いものを感じました。昔は、男性と女性の距離が遠かったのでしょうか。あと、大気都比売神は食物神で、死んで五穀が生まれるということは分かったのですが、「頭に蚕生り」がどうしても納得できません。どうして食物神なのに蚕なのでしょうか？　稗などでも良さそうなところなのに・・・。あと、スサノオという暴力の象徴をきっかけに、豊かさが生まれるという話が不思議だな、と思いました。まるで戦争にいって科学技術が発達する未来を予言しているようで、面白いです。

平安貴族の世界は『源氏物語』などでも知られるように、われわれの想像を超えた特殊な男女関係があった世界ですね。高貴な女性は、公の場に姿をあらわすことは絶対になく、成長すれば父親にさえも顔さえも見せないと言われています。『源氏物語』の「野分」で、風に御簾があおられて、夕霧が紫の上を垣間見ることで、思慕の念を募らせるのも、そのような状況だからです。視線を交わすなんて、とんでもないことなのでしょう。「呼びかけに返事をする」というよりも、和歌の手紙が送られて、それに返書を返すと、男女の関係を認めるということではないでしょうか。「頭に蚕生り」は、教科書にも書きましたが、中国か日本での付加的な要素かと思っています。

「カミ」というものが恐ろしいという認識には少し驚きました。たしかに、生命の誕生や死は神秘的ではありますが、当時の人にはどのようなメカニズムであったのか理解できていないのかもしれません。分からないものは恐ろしい・怖いというのはあり得る発想かなと思います。この授業のエロ・グロはある種生命の誕生と死を別の視点から捉えることができるようなテーマなのかなと思います。象がインドにおける男性の象徴だと授業でありましたが、逆に女性の象徴に捉えられている動物は何になるのでしょうか？

エロ・グロが生と死に対応しているのは、授業でもはじめの頃に紹介したとおりですが、それを対立するものとか、両者を含む両義的なものとしてとらえるのではなく、両者の間にある交替のメカニズムとか、第三の要素として「滑稽」を持ち出すことが、この授業のねらいです。女性に対応する動物は何なのでしょうね。女性＝植物というのは、第一章のとおりですが、動物はあまり思いつきません。キツネ、ネコ、魚とかが出てきますが、いずれも特別な状況でのシンボリックな動物ですね。

11月2日の授業へのコメントと回答

「恥じる」という概念は社会的なものであり、「表現」もまた社会的なものだと思われる。その衣類のあり様が性を隠さず、誇張するものとなって、恥じるべき対象となることが皮肉っぽいと感じられる。

そうですね。「恥じる」という行為はきわめて社会的ですし、文化的ですね。たしか『羞恥心の文化史：腰布からビキニまで』という本もありました。この本のタイトルなどは、前回の腰飾りの話にぴったりです（執筆時には忘れていました）。隠すからそれを見ようとするところに、文化や社会が生まれるのでしょう。

三階宝階降下で匂いの話が出てきましたが、嗅覚って味覚以上に脳にダイレクトに届きますよね。自分は特に匂いで思い出すこともありますし、匂いから味を思い出すこともあるので、以前おっしゃってた「食べる」ことのエロティックさに匂いもつながっているような気がします。サーンチーのヤクシニーの後ろ姿が少女のようとおっしゃってましたが、自分もそう思いました。お尻すごく小さくないですか？　すごくくびれていて腰がしっかりした姿が多いので、さぞやお尻も大きいだろうと思っていたら、そうでもなかったのが印象的でした。ちなみにカンボジアでは今でも「腰回りがしっかりしてお尻が大きい女性がうらやましい」と言っていました。

嗅覚が他の感覚よりも脳にダイレクトというのは、私も同感です。記憶に結びつくことが強いのも、経験があります。学生の頃にネパールのカトマンドゥに滞在したことがあるのですが、バターの灯明の燃えるにおいや、供物の食べ物がすえたようなにおいは、強烈な印象を残しています。インドを旅行しても、ヒンドゥー教の寺院などで同じようなにおいをかぐと、たちまちカトマンドゥのお寺の記憶がよみがえります。一種の刷り込みのようなものでしょうか。サーンチーのヤクシニー像の後ろ姿は、現地に行ってはじめて気がついたことです。前からの姿は写真でよく見ていたのですが、実際にストゥーパに上ってみて、後ろ姿を間近に見たときは、前の姿よりもはるかに魅力的でした。現地（フィールド）に行くのは、やはり大事なことですね。

『白雪姫』『美女と野獣』、西洋絵画におけるサテュロスとニンフ、西遊記の猪八戒と少女の話など、美女と小人あるいは醜男の話が多いのに対して逆の美男と醜女の話が本当にない、思い浮かばないというのはとても不思議です。これは民話などにもよく見られる傾向なので男性だけでなく女性の思考も反映されているように思われます。男女で感情移入の方向性に違いがあるのかな、と。

美女と醜い男という組み合わせは、教科書の前半の方を執筆している時に、とくに気になったことです。ゴブリン型のヤクシャの出現が、女性の世俗化というか美女化とセットになっているのが興味深かったのです。例に挙げてくれた物語の場合、おそらくそれを作ったのが男性であると考えると、一種の願望表現かもしれません。美男と醜女の組み合わせは、『源氏物語』の光源氏と末摘花があります。これも、作者の紫式部が女性であることと関係があるかもしれません。しかし、紫の上をはじめ、ほとんどの女性の登場人物は美女ばかりですね。今回配布予定の資料は「幻の第3章」ですが、この美女と醜男の発展段階を扱っています。どのような展開になるか読んでみてください。

スライドで見たヤクシニーなどの像がとても興味深かった。やはり男に比べると、女性には装飾品など女らしさを引き出す工夫があった。胸を強調するための首飾りや腰回りの装飾など、先生も最後におっしゃっていたように、体そのものでエロスを表現しているのではなく、そのような飾りがあることでより一層きわだっていることがよく分かった。そう考えると現代でもそのような風潮はあるわけで、“見えそうで見えない”とかそういうファッションに今の若者もひかれているような・・・。いろいろ仏教美術と共通しているところってあるなと思いました。

人間の基本的な考えは変わらないのでしょう。ブーテーシュワルのヤクシニー像で、腰飾りが性的なアピールをしているというのは、これまでだれも言ったことがないと思いますが、律を読んでいて、おそらくこれに対応していることが、あの部分のヒントになっています。律はこの後、第3章で詳しく取り上げますが、過激な内容が頻出します。現代に通じるものもあれば、理解を超えているような内容もあります。

サーンチーのヤクシャと、サーンチーのマーラの首領の外見を比べると、やはりターバン状になった頭部や腕輪といった共通点が見られ、イメージの変化が確認できました。滑稽さや女性らしさといった世俗的なイメージが、なぜ宗教と結びついていくのか、改めて疑問です。

聖なるイメージが世俗化すると、エロスとグロテスクに分化するということでしょうか。そのいずれもが過剰となると、滑稽になるという図式があると思います。そのすり替わりのメカニズムや、宗教美術としての特質などが、授業を通して明らかになるのを目指しています。

“女性が何処を隠すか?”というのは、文化的にもとても興味深いと思います。日本だと、胸元(陰部は当然として)を見せるといやらしく、足は見せてもOKですが、他の文化、他の時代では、私たちの姿がいやらしく見えることもあるのでしょう。

インドに留学したことのある知り合いの話です。インドではサリーを着た女性をよく見ますが、この衣装は、足はすっぽり隠してしまうのに対して、腹部や背中はあらわにします。インドの留学を終えたこの知り合いは、成田空港で若い女性の足を見たら、鼻血が出そうになったそうです(もちろん、知り合いは男性です)。文化の違いとは、そんなものです。

私はベリーダンスやインド舞踊などを独学でやっているのですが、特にベリーダンスにおいて踊るときの基本イメージというのが長い髪をうしろにたらして、腹にベルトを巻いてそれにいろいろな装飾品をまきこんでつけるという形なのでベリーダンスの起源はこのヤクシニーの像からきているのかなと勝手に考えてみました。

これはおもしろいコメントでした。インド舞踊もベリーダンスも、私はほとんど知りませんが、腰の装飾品が重要なポイントになるというのは、前回のヤクシニー像の解釈にぴったりですね。ついでに、体の動きやポーズの意味なども、造形作品と関係があれば教えてください。ヒンドゥー教のお寺では、寺院の装飾に踊り子像をたくさん表したものがあります(タミルナードゥの寺院など)。実際の踊り子たちの姿をあらわしたと言われていますが、その源流は古代の仏教美術にあるのかもしれません。

神が下界におりてきて世俗化すると、女性は性の対象になり男性は滑稽化するという話が興味深かったです。図像を見ても、男性の方は醜いというかおもしろい形になるのに対し、女性が滑稽化するのは見たことがない気がします。以前先生は「インド人は美女しか図像に表せない」とおっしゃっていましたが、なぜ男性はできて女性はできない

のでしょうか。ところで図像を見ると胸がバーンと出ているからインド人は胸が好きなのかと思っていましたが、そういうわけでもないんですね。女性のどこに魅力を感じるかは国や文化、時代でちがうんだなぁと思いました。

インド美術では女性は醜くならないというのは、これまでのところではそのように言えるのですが、今回配布予定の資料（幻の第3章）では、醜い女神が登場することに気づきました（書いておきながら、授業ではすっかり忘れていました）。カーリーやチャームンダーといわれる女神です。グロテスクで残虐な女神なのですが、それも度を超すとやはり滑稽になります。しかし、滑稽への転換が、ヤクシャのような男神とは少し違うような気がします。このあたりは、皆さん自身でも理由を考えて下さい。日本美術の場合、中世の女神の中にグロテスクなのがいます。天川弁才天がそれで、教科書では第7章で取り上げています。ヤクシニー像のような胸に、当時のインド人（とくに男性）が魅力を感じていたかいないかはよくわかりません。おそらく感じていたでしょうね。しかし、現代のわれわれとは少し違う感覚を持っていたのではないかと思っています。

グロテスクの表現がインドでも日本でも、救いがないくらいめったくそでそこまで言うか！？　というくらいの言われ方なのが面白かったです。その前がえもいわれぬ「美」だったからこそそう思うのでしょうか。このグロテスク、死を内包するのが「世俗化」なのだろうか。死のないもの、内に死や性を含まない清らかなだけの女性は崇拝するような美しさではあるけれど、手を伸ばしたくなるような美しさではないのだろうか（マリア像とミトゥナのように）。同じ男性視点で見れば、ただ美しい男の像なんか見ても面白くないだろうし、ヤクシャや戦神の方が好まれただろう。と考えると、「美」は2種類あり、グロ、死の暗示は、より世俗化の「美」、我々に近い「美」なのだろう。だとすると、スカトロやネクロフィリアの概念も納得できる。

美というもののとらえ方ですね。つねに死や性を含むことが美の条件であるとすれば、授業で行っていることは、美とは何かということの再定義になります。スカトロジーもネクロフィリアも、教科書を書いたときには意識していたのですが、実際はまったく取り上げられませんでした。地獄絵関係で少しふれたような記憶もあるのですが、これも悲しいかな、割愛された部分です。時機を見てこの部分も配付資料で読んでもらうつもりですが・・・。

ヤクシャとヤクシニーの話を聞いて、神々が人間界に降下してくることで世俗化し、エロスと滑稽（グロテスク）の対象になるのは人々の期待だというのが面白いとおもいました。サーカスのピエロは確かに滑稽ですが人によってはグロテスクにも捉えられると思うし、「エロスと滑稽」はディズニーの「美女と野獣」や、日本では「一寸法師」、ギリシャ神話でのアフロディテとヘパイトスなど、色々なとこで見られると思います。（ちょっと違うのかもしれませんが）　美女が必ずしも美男とセットにならない、というのは人々の願望なのでしょうか。

人間はグロテスクなものを滑稽と感じるのでしょうね。残酷なのですが。小人のサーカスについては、授業でも紹介したＪ．アーヴィングの『ホテル・ニューハンプシャー』に登場します。主人公の一家がアメリカからヨーロッパに移る前の場面で登場します。これなどを読むと、小人やサーカスに対して、日本人にはわからない独特の感覚を持っているのを感じます。神話や昔話もその中で生まれたのでしょう。なお、Ｊ．アーヴィングには『サーカスの息子』というサーカスをタイトルにした小説もあるのですが、これはまだ読んでいません。インドが舞台なので読まなければと思っているのですが、アーヴィングの小説にしては導入がいささか退屈で、途中で止まっています（授業とはあまり関係ない話ですが）。

11月16日の授業へのコメントと回答

ミトゥナと一緒に、変なものを描く、というのが面白いと思いました。最近友人と絵しりとりをよくするのですが、その時に、1つのものを表すために複数のもの（似ているものをならべたり、それと反対のものを書いたりします）を描くと、格段によく分かってもらえるということに気付きました。ミトゥナを描いた人も、自分の描きたいものをテキカクに伝えるために、複数のものを描いたのではないかと思います。

絵しりとりというのはやったことがありませんが、なかなか高度でおもしろそうです。ミトゥナ像のまわりに何を描くかが、第2章の前半のポイントのひとつで、引き立て役のガナや、享楽の生活を送るバルコニーのカップルなどをあわせて、全体の意図を読み取るようにしています。他の解釈も可能だと思いますので、いろいろ挑戦してみてください。

腰巻のみの姿と聞いて、相撲を思い出しました。「すまい」に「相撲」の字をあてるのは仏典の影響という話を聞いたことがあります。dharma、artha、kāma、mokṣa の話で、最初から解脱を求め、残りのものを捨てる仏教は、規定のカリキュラムを達成できなかったら落ちこぼれというようなイメージを抱きました（言い方は悪いですが）。像の中の蛙をくわえた蛇や交尾する象は、時間の経過や複数の場面（彼らの心象風景）を、一つの場面の中に比喩的に収めたのかと思いました。様々な奇妙な図像は、彫刻した職人さんたちの趣味の発露ではないかと思いました。

「すまい」については情報を持ち合わせていないので、わかりません。平安時代の宮中の行事の相撲節会（すまひのせちえ）あたりが用例としては古いようですが・・・。古代インドにおける出家のとらえ方は、当時のアーリア人社会を考えるときに重要です。もともとアーリア人は釈迦のように出家するという考え方はなかったのですが、家を捨てて解脱を求めるという生き方が現れました。インド土着の考え方のようです。アーリア人社会は家を基盤としているので、それを放棄することはアーリア人社会の崩壊につながります。そのため、懐柔策として、老年期に入ったあとの人生の選択肢として、苦行や出家の道を容認するようになります。釈迦などの出家者は、このような懐柔策にしたがわず、解脱を人生の最高の目的として考えた人たちなのです。コメントの後半の奇妙な図像の解釈は、私も同様です。何か物語があるのかもしれませんが。

一般的に考えると、「男女平等」という考え方が出てくるのは近現代であるはずなのに、「男女平等」→「男性優位」という“逆の流れ”が不思議で仕方がありませんでした。ご指摘がありませんでしたが、2_37mithuna_sirpur3.JPGの左下にも、小人？ 猿？ がいるような気がしました。動物のモチーフは、やはり男女を暗喩していると思います。蛇が蛙をくわえる構造は、位置的にも、力関係でも男性が女性に迫る様子と一致しているような気がするので。また、想像にまかせるならば、猿は男性を表すのではないかと…。先生のご指摘の通り、「人間のずるがしこさを表している」とか、2_39lizard&monkey.JPGでイグアナの上に乗っている様子とか、2_50woman_monkey.JPGの女性にいたずらする女性とか、こうしたサルの描かれ方を総合的に考えた結果です。

近代社会における男女平等と、授業で取り上げた古代の仏教美術における「同等の扱いを受ける男女」は別のものと考えています。近代的な法観念にもとづく男女平等は、古代にはありえません。イメージ的に同等の扱いを受けていることと、社会の中でどのような位置に置かれているかは、関連しないのです。むしろ、母系社会のような社会の仕組みとかかわる問題だと思っています。日本でも平安貴族に見られるような通い婚は、女性を中心に「イエ」が続いていきますが、だからといって、女性の地位が高かったわけではありません。2_37の画像にも、向かって左下に人間がいます

が、表面が剥落しているため、どのような人物かわかりません。猿ではないようです。その猿ですが、教科書を書いているときにも猿については気になっていたのですが、あまり明確な解釈を示すことができませんでした。今回の授業で少し資料を紹介しますが（山本周五郎の小説です）、滑稽や猥雑と結びついているのが猿だと考えています。もちろんそこでは男性のイメージです。

女性を痛めつける（迫ろうとする?）男性像がある一方で男性を痛めつける（というより殺してしまう）女性像もあるのが面白いと思いました。一見男尊女卑のようで女性のほうは男性の首を切って殺しているので、女性のほうが強いような印象を受けました。女性を殺す男性像や男性に迫る女性像は存在しないのでしょうか？　インドの宗教像は日本の春画のような一面がありますね。

宿題にした「幻の第3章」の最も重要なテーマは、残虐な女神で、一般にドゥルガーと呼ばれる女神です。美しい女性が、醜い男性を殺すところがポイントです。しかも、そのような強い女神を期待するのは、おそらく男性でしょう。女性を殺す男性像は、インドにはあまりいないようです。現実社会そのものなので、神様にする必要もなかったのでしょう。

日本の近世前期における遊女は諸芸を備えた理想の女性とされていましたが、近世後期になるとただ性を売るだけの存在として悲惨だとみなされるようになってしまうのですが、ガニカーも、もてはやされる時代から卑しまれる存在への転落のようなものはあるのでしょうか。

『カーマスートラ』を中心に遊女の話をしましたが、私はこれはかなり特殊な遊女だと思います。実際に都市にそのような高級遊女がいたかもしれませんが（ヨーロッパでは『椿姫』などが有名）、大多数の遊女は単なる娼婦でしょう。それは日本でもヨーロッパでも同じだと思います。もうひとつ、遊女でよく言われるのが、もともとは巫女のような宗教的な職能者であったというものです。これもあやしいと思います。このあたりは、小谷野敦『売春の日本史：遊行女婦からソープランドまで』（新潮選書2007）が詳しいです。

「水中の悪魔を殺す女神」の像は、消費する対象にまでおとしめられた女性が、今度は逆襲しているように見えました。ストレートに男性に対して怒りを表すのではなく、間接的に表現しているのではないかと思いました。

それだとフェニミズム的な発想をする人に好まれそうですが、上記のように、このような女神を登場させたのは、女性ではなくむしろ男性だと思います。消費される対象であることの延長線上のような気がします。

以前、Y先生の演習で石窟を調べた時にミトゥナ像が出てきて、なんでこんないかがわしいモノが神聖な石窟の中にあるんですかと聞いたら「魔除け」と教えていただいたのですが、これがどうして魔除けになるのでしょうか。魔としては電車でイチャつくカップルを見ているサラリーマンのような心持ちになるからでしょうか。

ガイドブックなどにはたしかに「魔除け」説が紹介されていますが、私はあまりそのような考え方を取りません。むしろ、質問してくれているように、どうして魔除けになるのかという疑問の方が正しいと思います。ヒンドゥー教の神話には、神々を窮地に陥らせる魔（アスラというのが一般的）が登場しますが、ミトゥナの姿を見て退散したというような話はありません。ちなみに、ヒンドゥー教の寺院の各方角には、護方神と呼ばれる神々がいて、その名のとおり、寺院を守っています。ミトゥナごときでは魔を撃退することなどできないと思います。いちゃつくカップルを見るサラリーマンというのは、私としては予想を超えた解釈なので、斬新でしたが・・・。

今日は男女の関係とグロテスクに関して取り上げられていましたが、以前、教育学類のK先生の授業でタコに襲われる女性を描いた錦絵の成立を考察されていたのを思い出しました。そもそも幸岩舞の『大織冠』というエロスの要素を持たせないものから、女性とグロテスクな生物のエロスというものへの変化は、エロスの中にグロテスクを見出し、それを人間以外の生物で表すという考え方が、日本の前近代社会にも存在していたということを示しているのではないでしょうか。

タコにからみつかれる女性の絵は、北斎の浮世絵（錦絵ではないでしょう）として、最も有名なもののひとつでしょう。私も、学期のはじめに紹介したスライドショーの中に入れておきました。女性と動物との絡み合いというと、獣姦のようなイメージがありますが、この場合はタコであることが重要でしょう。私自身は、この浮世絵はそれほどグロテスクだとは感じませんでした。むしろ、授業では紹介しませんでしたが、外国人（異人）や老人との性行為を描いた春画の方が、グロテスクに見えます。

第3章を少し読んでみて、シヴァについて色々なことが書かれていましたが、『3×3EYES』という昔あったマンガを思い出しました。実家に全巻あるので読んだことがあるのですが、相当面白いです。（そして長い！） これはインドの神々が登場人物で、今回のこの話をかなり身近に感じられます。原作に忠実ではないと思いますが、インドの神々を扱っているマンガは珍しいですし、知らない人もいると思うので、是非紹介してもらいたいです。

私のまったく知らないマンガですが、機会があれば読んでみます。私の印象では、インドの神様はマンガやアニメ、さらにはゲームの世界では、かなり人気のようです。日本やヨーロッパの神様にはない「濃い」ところがいいのでしょうか。じつは日本の神様も、けっこう濃いのですが・・・。

11月30日の授業へのコメントと回答

確かに「男装の麗人」というのは人気のあるテーマですが、男性よりもむしろ女性に支持されているように思います。『ベルサイユのばら』のオスカルや『セーラームーン』のセーラーウラヌスなど少女漫画に多いのもそのためでしょうし、彼女(?)らを支持する男性はあまり見たことがありません。対し、「残虐の美女」(同じく『ベルサイユのばら』外伝のモデルとなったハンガリーの女性貴族を思い出しましたが)というのは男性の支持も高いようで、(マゾヒスティックな願望の表れでしょうか?) 両者には結構差があるように思われます。

そうですか。たしかに、「男装の麗人」のファンは女性に多いのかもしれません。宝塚も圧倒的に女性のファンの方が多いようです。男性的な雰囲気のりりしい女性を、女性があこがれるというのも、何となくわかります(セーラーウラノスは、そういう立場なのですね)。しかし、男性が求める女性像のひとつのプロトタイプにもなると思います。複雑です・・・。「男装の麗人」と「残虐の美女」がべつものというのも、私はあまり区別していませんでしたが、正しいかもしれません。小説などでは「宿命の女」(ファム・ファタル)というのがいて、しばしば男性を翻弄します。ピアニストの青柳いずみこに『無邪気と悪魔は紙一重』(文春文庫)というエッセイがあり、そのあたりがいろいろ論じられています。

男装した美女というモチーフが魅力的なのは、通常共存しないような魅力がつめこまれているからでしょうか。ところで男装した女性に究極的に求められるのが女性としての魅力であるのに、女装した男性(歌舞伎の女形など)に究極的に求められるのも男性的魅力でなく女性以上の女性らしさなのが不思議だと思いました。

たしかにこれも不思議ですね。男性と女性は対称的な関係ではないのでしょうね。女性を反転させても男性にはならないようです。遺伝子レベルでのXYとXXの関係のようなもの?(意味不明かもしれませんが)

物語の中で猿が性的な話と結びつくのは、猿が人間の祖先でありながらも人間にとっては野蛮な存在と言えるので、我々人間の性的欲求を代替して満たしてくれるものとして、人間が猿を捉えているのではないかと私は思いました。古代に、人間の祖先が猿であるという知識があったかは分かりませんが・・・。坂口安吾の小説『桜の森の満開の下』、『夜長姫と耳男』に登場する主役級の女性も、「残虐なる絶世の美女」です!

猿が人間に最も似ている動物であることはもちろんですが、そこから、猿にエロティックなイメージを持たせることとのつながりが、私としては気になります。教科書の第3章(今回取り上げるところです)には、雌猿と交わる比丘の話が出てきます。坂口安吾の小説は読んでいないので、いずれ読んでみます。「残虐なる絶世の美女」タイプのヒロインは、たくさんいるのでしょうね。「残虐な女性」や「絶世の美女」だけでは、あたりまえすぎて、おもしろくないのでしょう。

絵の中の人物はみんなフリーダムです! キューピッドがいっぱいいる絵がありましたが、かわいいものも多すぎると気持ち悪いです。

フリーダムな絵はティッツィアーノやプサンですね。このあたりの絵画は、イコノロジーの研究対象として、人気のジャンルですが、私も好きです。キューピッドがいっぱいいるのを見て、多すぎるのは気持ち悪いというのは、まったく同感です。同じものがうじゃうじゃと湧いている状態は、多くの人に視覚的に気持ち悪さを感じさせるようです。シラミがびっしりとたかったところとか、樹木の樹皮の内側に冬眠中のテントウムシがいっぱいいるのとか・・・。同じようなものがたくさ

ん整然と並んでいるというのは、美しいはずなのに、ある種のグロテスクさを持っていると思っているので、4年前の授業では少しふれたのですが、あまり仏教美術としてはあてはまるものがないので、教科書では取り上げませんでした。今回の授業でも登場しません。しかし、気になるテーマではあります。人工物であれば、整然と並んでいても気持ち悪くないのですが、生き物だとだめなのかと思ったりしています。

今日スライドで見たマヒシャースラマルディニーの図像が、敵を倒すときにとっている、敵である水牛や人間をふみつけているポーズが私にはなんだかエロティックに感じられました。美女と一緒に描かれるガナも美女の足の下にいて、ふみつけられていると思うんですが、インドにおいて、踏むという行為にはなにか性的な意味合いとかもあるのですか。

インドに限らず、美女が男を踏みつけているというのは、普遍的に性的なイメージでとらえられるのではないかと思います。もちろん、それはおもに男性側の視点からでしょう。それもマゾヒスティックな。

女性は“美”があるからこそ、男性の前で弱い立場も強い立場も演じられるのだなと思ったし、その姿にとても魅力を感じた。だから私たち女性は、そのような特権(?)を求めて、常に美を追求しているのかな・・・と思いました(笑)それに比べて男性は滑稽になっていくようで・・・、そう考えると今もTVなんか見てると滑稽なことが似合うというか、そういうことをしているのはほとんど男性だなと思いました。いろいろ違ってたらすみません。まさか女性が呑み込むことが生命を生み出す性行為とかにつながるとは思わなかったし、第3章はいろいろ発見があっておもしろかったです。

幻の第3章の「食べること」と「性行為」との類似性は、捨てがたいアイディアだったので、3章がボツになったため、「はじめに」に繰り入れました。シンハラ物語の羅刹女のところです。ただし、この考えはかならずしも私のオリジナルではなく、民族学者の梅棹忠夫に負っています。食欲も性欲も人間の本能であるが、それをどのように行うかは、すぐれて文化的であり、文化人類学の研究対象にふさわしいというものです。そして、食の文化は石毛直道が、性の文化は上野千鶴子がその旗手であるというようなことを言っています(上野千鶴子との対談の中で)。私がこれを読んだのは、今から20年以上前なのですが、今なら、井上章一とか小谷野敦とかが、性の文化の方にはあげられるかもしれません(ちなみに、井上章一の新刊と私の『エロスと・・・』を対比させているブログがありました)。

「性の転換」が多く描かれているということを聞いて、『とりかえばや物語』を思い出しました。これは既に最初から性の転換(男が女装し、女が男装する)が行われていて、後に「性の再転換」(つまり本来的なイメージへ戻る)がおこります。この、最後に元に戻るという結果は、ストーリーとしては面白いのですが、とても不思議でなりません。他にも、このような性の再転換がおこる物語はどんなものがあるのでしょうか?

私の場合、性の転換(再転換)はオペラのイメージが強くあります。たとえばリヒャルト・シュトラウスの『バラの騎士』に出てくる貴公子オクタヴィアンなどがそれで、メゾ・ソプラノが演じる男性役です。しかも、劇の中では女装をするという場面もあります。オペラには「ズボン役」と一般に呼ばれる女性(女声)の男性役がありますが、このような登場人物に人々が求めているのも、倒錯した性のイメージなのかもしれません。「フィガロの結婚」のケルビーノ、「仮面舞踏会」のオスカルなどなど。『とりかえばや物語』は読んでいないので、ぜひ読んでみます。

強くて美しい女性が求められているのは昔も今も変わらないのですね。強くて醜いカーリーも結局美しく描かれるようになったことも興味深いです。私の知っているかぎりですが、醜い女性像として挙げられるのは、末摘花・アマノウズメノミコト・はちかぶりと、美しい女性像よりはるかに少ないように思います。といっても、末摘花、アマノウズメノミコトは道化として描かれていますし、はちかぶりも結局美しい女性と判明するので、結局美しい女性像が求められているんでしょうか。

カーリーの場合、グロテスクさは次第に影をひそめて、次第に美しくなるのですが、その一方で、滑稽さを持つ場合もあります。エロスとグロテスクが滑稽に転じることの好例だと思っています。シヴァの妻には、典型的な美女であり、シヴァにつくすパールヴァティー、美女でありながら敵を殺戮するマヒシャースラマルディニー、グロテスクなカーリーと、物語の女性像の典型となるような女神がひととおり登場します。このうち、滑稽化するのがカーリーだけというのも、グロテスクから滑稽への転換として、気になるところです。

12月7日の授業へのコメントと回答

蓮華色比丘尼の話を聞いているとキリスト教のマグダラのマリアを思い出しました。内容は必ずしも一致しませんが、強いエピソード性を持っていて物語を脚色している点は似ているなと思いました。こう律を見ていると、当時のインド社会での性に対する考え方が現在の日本とは全く違うものであったことが分かる気がします。

私も以前から、蓮華色比丘尼とマグダラのマリアの対比を考えていました。中公新書から『マグダラのマリア』という本が出て着るので、私も蓮華色比丘尼の図像学のような本が書けないかと思っています。ついでに言うと、デーヴァダッタとユダもよく似ているような気がします。教科書の第3章では、このふたりを軸にまとめようかと思ったのですが（4年前の授業ではデーヴァダッタも取り上げました）、内容が散漫になるので、蓮華色のみにしました。第3章でときどきデーヴァダッタが出てくるのは、その名残です。律は仏教学では地味な分野ですが、実際の仏教教団や当時の社会のあり方がストレートに出てくるので、私は興味があります。今回、はじめてくわしく読みましたが、エログロ以外にもさまざまな情報の宝庫だと感じました。

律の罰則規定に女性に関することが冒頭に登場し、また細かく定められていることは、男性にとって女性がいかに“魅力的”かを物語っているように思います。同一空間にいたり、長く話をしたりするだけで、「過ち」につながるおそれがあると考えなければならないほど、女性は「危険分子」なのでしょうか。危険な女性に魅了されずにはいられない男性のジレンマは、かなり根深いように思われます。

これも、授業で強調した男性視点から編纂された律の特徴だと思います。女性への恐怖というのが、律の条項を見たときの私の感想です。おそらく、女性が編纂したとしたら、まったく別の性格の文献になったと思います。この授業を受講している皆さんも、男性と女性で受け止め方が違うのではないでしょうか。

日本の僧侶はどうなのか、という話が出ましたが、中世には寺は武装勢力でしたし（「寺内で殺人するな」という禁令が出たりしていたようです）、衆道なんかもあったりしたので、先生のおっしゃるように、律には背いていると思います。蓮華色比丘尼は色々なエピソードがありますが、蓮華色比丘尼は、律の条文用に生み出された架空の人物のようにも感じました。律の条文は、さまざまな場合が書いてありましたが、判定者はなぜここまで（実現不可能そうな場合までも）考えたのか、不可思議です。美しさを表現する語彙は何やら少ないように感じました。グロテスクを表現する方が人間は得意なのでしょうか。因みに、「尋いて」は「ついで」です。

日本仏教における律の問題は、きわめて重要だと思います。奈良時代の鑑真も、日本に正しい律をもたらすためにやって来ましたし、その後の戒壇院制度は、国家が仏教に関与する重要なシステムです。鎌倉期にあらわれた浄土教関係の宗派などは、ほとんどが律に抵触することを行っていますし、それを仏教の枠組みの中で行ったことに、日本仏教の特色があると思います。ものすごいジレンマだったはずです。その一方で、叡尊や忍性に代表される真言律宗（この名称は明治以降のものですが）のように、律を仏教復興の旗頭にする動きもあります。蓮華色が実在かどうかはわかりません。他の弟子たちも同様でしょう。釈迦の時代の比丘尼の中ではもっとも有名だったようです。美とグロテスクの語彙については、たしかにそうかもしれません。いろいろ考えてください。「尋いて」についてはありがとうございます。私も漢和辞典で調べました。「ただちに」という意味なのですね。勉強になりました。

律を読んだのは初めてだったんですが、ずいぶんと詳細に書かれていたので驚きました。これを口承で伝えるのは大変だったんじゃないかなあと思うんですが、シャカが口承にこだわったのには何か理由があるんですか？　先生はシャカに直接聞けるからとおっしゃっていましたが、文字にしてしまった方が教えも広めやすいのではないかと思ってしまいました。

口誦伝承というのは、インドの聖典では一般的な伝達形式です。釈迦の時代も、それ以降も、教えを文字に記すという方法は、長くとられませんでした。紀元後4、5世紀にならないと、写本などもないようです。インドの代表的な聖典ヴェーダもそうでした。これはインドに限らず、ホメロスのイリアスやオデュッセイア、あるいは日本でも古事記などでも同様です。われわれは文字の資料と音声を同じ「言葉」としてとらえますが、古代や中世の人にとって、音を持つ「言葉」は特別な価値を持っていたようです。

蓮華色の人生は壮絶ですね。自分で目をえぐり出すなど、すさまじいと思いました。彼女が求めたのは何だったのでしょうか。律は何だか人間のみにくい所を出しているような気がしました。だってふつうなら動物とは性交しないと思います。また、ちょっと厳しすぎるのではとも思えましたが、実際にこれをやった比丘か比丘尼がいるのですね。法が罪を定めるのだとは言いますが、行いがそこにあったから定めざるをえなかったのですね。今回は生々しい話が多かったです。そんなに行為をしたいなら出家しなければ良いのにと思いました。

動物との性交は獣姦と言って、倒錯した性行為のひとつにあげられます。授業でもお話ししたように、律はすべて実際の行為にもとづいて制定されるので、いずれも比丘たちが犯した行為です。ないようはたしかにすさまじいというか、生々しいですね。出家しなればいいのに、というのはもっともな意見ですが、出家してしまった限り、律を守らなければならないのが仏教教団です。

蓮華色比丘尼の生い立ちはなんだか光源氏を思わせました。このような物語は多々あるとは思うのですが、彼女の場合そのセクシュアリティを示しているのではないかと思いました。その生い立ちの通り、彼女の生涯はあまりにも性的暴行に満ちていて（言い方は悪いのですが）エロチックやグロテスクというより滑稽に感じてしまいました。律を読みといていくと、仏教って女性に翻弄されているというか煩悩まみれなんだなと思います。

光源氏との共通性は、藤壺との密通ですね。女三の宮と柏木の密通もそうでしょうか。いずれにしても、愛憎の世界は、地域や時代を超えた共通性があるようです。エロチックとグロテスクと滑稽が、授業全体のテーマなので、そのようにとらえていただければ、いいと思います。源氏物語はあまり滑稽ではないのですが。

律の中の書き方を見ると、比丘尼がまるで比丘にとっての危険物であるような感じがした。また、比丘が自慰出精すら許されないのに、比丘尼は性交をしても快楽を得ていないと言えば許されるのは、男として何か納得できなかった。

男性視点でもいろいろあるのですね。もっとも、男性の比丘も快楽を得ていないと言えば、許されます。同じように、快楽を得ていないという表現でも、男性と女性では条件がことなるのではと思います。

律の形式など、あまりくわしくないので、具体的なイメージがつかみにくかったです。今日はちょっとハードな内容でちょっと居心地が悪かったですが、色々と具体的な規範があることにおどろきました。禁じているわりにはくわしすぎ

ますね・・・。男性視点で書かれているのもあって、男性不信になりそうです（笑）。女性に対する恐怖というのは、女性が生みだす＝何かをつくりだす、というある種、神的要素をそなえているからではないでしょうか。

たしかに男性不信になりそうです。居心地が悪いときは、どうか聞き流して下さい。コメントの記入も、書きにくかったら白紙でもいいです。おそらく、先回の内容が、全体でも最もきわどいと思っています。女性に対する恐怖の理由も同感です。今回の場合、とくに女性が快楽を味わうことへの恐怖があるような気がします。

戒律は特に性に関して厳格に定められており、何とか快楽を得ようと女性以外の者やモノと交わろうとする比丘がこっけいに思えました。出家者という自分たちと全く住むところの違う者ですが、本能を抑えられるとここまでの倒錯した行動を起こすというのは驚きました。やはり人は本能には逆らえないのですね。だから悟りを開いた人はもはや人ではないのだろうと思いました。

教科書でも、最後にまとめたように、比丘の姿がグロテスクにも滑稽にもみえることを強調しました。エロスも過剰になったり、倒錯的になると、グロテスクになるのがひとつのパターンです。

12月14日の授業へのコメントと回答

物語において「三」度は基本というのは非常に納得できました。桃太郎のおともは三匹、金の斧銀の斧の答えは三択、三匹の子ブタ、三枚のお札など・・・。私は「3」という数字はバランスがいいと感じるので好きですが、3を好むのは人間全体に言えることなのでしょうか? まぁ、「3」を好むというよりは「素数」を好んでいるという気もしますが・・・。
数の感覚は人によって異なるので、一概には言えませんが、3という数は安定していて、好まれることが多いようです。論文を書くときや発表するときのコツですが、要点やテーマを3つに絞ると、聞いている方は頭に残りやすいと言われます（教科書のオリジナル版が、3部構成で、それぞれが3章からなるのも、それを意識していました）。昔話での3の重要性は、授業でもボソッと言いましたが、グリム研究の小澤俊夫氏の講演会でもお聞きしました。物語にリズムが生まれるそうです。1,2,3とか、エイ、エイ、オーとかのかけ声と同じです。宗教で重視される数は、16とか32とかの割り切れやすい数と、コメントでもふれてくれた素数があります。安定した数とゴツゴツした数というイメージです。ちなみに、素数についての考察や理論は数学の数論でも好まれますね。

前回の授業で、淫戒は異性・同性・動物と交わることとありました。イシシンガとナリニカーが三度交わったのは、この異性、同性、動物という三要素があることにつながると思いました。すべての要素でアウトになるようにすることで、淫戒を破ったことを念を押している（?）感じがします。しかし、動物のところがよくわかりません。イシシンガが人間と鹿のハーフだからだと思いました。
そのような解釈は思いつきませんでした。たしかに、イシシンガはナリニカーを同性と信じ込んでいましたし、イシシンガ自身が動物から生まれていましたね。私は、熊に襲われたナリニカーを、去勢された男性ととらえていましたが、そのような見方もありかもしれません。もっとも、イシシンガの物語は律とはもともとは関係がないので、無理に結びつける必要もないのですが。

このあいだから、よく「座ったときに足の間が見えてしまう」というシチュエーションがよくでてきますね。パンツはけよ、と思うのですが、見える→興奮ってなるなら、なんで隠そうと思わないのでしょうか。
これも律とイシシンガを結びつけたことから、そのような符合が見られるのですが、たしかにいずれの場合もパンツをはいてほしいものです。しかし、そもそも、当時のインド人はだれもパンツをはいていなかったはずです。教科書でも書きましたが、日本でも同様です。着物と西洋風のパンツは、基本的に相容れないものです。有名な白木屋デパートの火災のエピソードがあります。

ダナエのもとに忍び込んだゼウスは雨であったし、そもそもゼウスは雷の神さまであったことを思い出した。狂言の雷は天候を司る神なので農耕のイメージがあるが、ゼウスは単に好色な気がする。
ギリシャ神話とインド神話には、共通点がたくさんあります。同じ印欧語族のためです。比較神話学というジャンルでは、すでに多くの研究があります。好色な神と農耕の神は、しばしば同一です。その背景には、農耕と性行為をパラレルと見なす人類の思考パターンがあるようです。

今昔物語のように500人の女性が歌いながらやってきたら、恐ろしくて逃げ出したくなるような気がします。一角仙の話は、「女→男への性の転換」「去勢」「男性機能」の3つの要素が様々な順列で組み合わされて、最後にどの要素が来るかによって、結末が変わるということでしょうか。様々なバリエーションがありそうです。『鳴神』を読んで米米CLUBの「ホテルくちびる」という曲を思い出しました。ノリがそっくりです。8分間一人芝居をやってる曲ですが。そういえば、「タコブネ」という生物をご存知ですか？　タコブネは交尾のあと、オスの性器がちぎれるそうです。おそろしいですね。今回の内容に近いことを、平瀬先生が先日語ってました。

たしかに、500人の女性が歌いながらやってきたら、ものすごい迫力でしょうね。マーラーに「千人の交響曲」（第8番）というのがありますが、ちょうどあんな感じでしょう（ちょっと違う?）。一角仙の話は、順列組み合わせの問題だけではなく、降雨と性行為をどのようにとらえるかという、文化の違いのつもりです。米米CLUBの「ホテルくちびる」は知らなかったので、ネットで見ましたが、よくわかりませんでした。私が連想した一角仙に近い話は、「薔薇の名前」という映画（ショーン・コネリー主演）で、若い修道士とジプシーの娘とのからみです。タコブネも知らなかったので、Wikiを見ました。その通りですが、「ちぎれる」というよりも「オスの交接腕がメスの体内に挿入すると切断されたかたちで、交尾が行われる」とありました（同じこと?）。その後、オスがどうなるかは書いてありませんでしたが、やはり死んでしまうのでしょうか。カマキリのオスもそうですが、オスというのは哀れです。（後記・別のサイトを見たら、死なないそうで、2ヶ月くらいで切れたところも再生するそうです。少し安心しました）。

今昔物語集での一角仙は青年の姿の一角仙と比べ滑稽で、またグロテスクに描写されているのが気になりました。差別的かも知れませんが、老人のイメージは滑稽やグロテスクといったものと重ねやすいのかもと思いました。この一角仙で思い出したのが漫画『アキラ』に出てきた老人の顔の子どもです。読んだ時はとてもグロテスクに感じましたし、子ども達が複数で真面目な話をしているのは少し滑稽にも感じました。

前も書いたかと思いますが、老人のイメージとグロテスク（時に滑稽）は定番ですね。大友克洋の『アキラ』は、私が学生のころに第1巻が発売されて、読んだときは衝撃を受けたのですが、そのあとを読んでいません。老人の顔の子どもも、見たようなおぼろげな記憶があるのですが、記憶違いかもしれません・・・。昔読んだSFのショートショートで、超高齢化社会の近未来で、若いことに価値が置かれ、だれもが若者のふりをして生きているという設定がありました。化粧などで、老人が一生懸命若者に化けるのです。それが露見したときの悲劇が物語の結末なのですが、テレビのバラエティなどが幼稚化している現在を見ると、すでにそのような社会になりつつあるような気もします。

インドの僧はひょんなことで精液を出しすぎだと思った。自慰を禁じると自発的に出すことが無いので、勝手に出てくるようなものというような共通見解になっているのだろうか・・・。それとも超人的な力で極限まで溜めこむと一瞬の気の緩みが全てを破壊させてしまうのだろうか・・・。

一角仙の場合、僧ではなくて修行者で、修行者自身は必ずしも禁欲が科せられているわけではありません（仏教の僧である比丘の場合は絶対です）。一角仙は修行のひとつとして、禁欲を科し、それによって何らかの超自然的な力を獲得したのでしょう。仏教の比丘に淫戒が定められているのは、それが新たな生存を生み出すための最大の原因になるからでしょう。生存とはすなわち輪廻であり、苦の連続です。インドの宗教のなかには、性行為を修行の方法のひとつにするものもあります。プラスと見るか、マイナスと見るかは、インドの宗教のなかでも一様ではありません。

ジャータカと鳴神の対比に関して、僕は「千と千尋の神隠し」を思い出しました。映画の中での描写を照らし合わせると、＜原因＞は両親の（人間の）強欲、＜止雨＞が環境の破壊、＜誘惑・破戒＞が主人公と神々との交流、＜降雨＞が強欲による自然破壊に気付く（一種の秩序回復）という風にも解釈できるような気がします。実際、「千と千尋の・・・」の設定の下敷きは、江戸期の遊女みたいな話を聞いたので。

「千と千尋」については、なんともわかりません。私自身はあまりピンと来ませんでした。むしろ、この映画は宮崎駿のなかのグロテスクなものの吐露のような感じがしました。ジブリ一般にも言えることですが、こういうグロテスクなイメージが受ける日本人というのは、かなり特殊な国民だと思います。とくに、子どもが喜んで見ているのが不思議です。なお、「千と千尋」の基本的な設定は、昭和期のけばけばしたレジャー施設のイメージではなかったでしょうか。江戸期の遊女は少し時代がずれると思います。

12月21日の授業へのコメントと回答

観仏というのは瞑想の中で仏や極楽を見るとすると、想像を超える“極楽”は見ることができないのでしょうか。あるいは瞑想の中では、この世ならぬ（?）極楽が現れるのでしょうか。

おそらく、瞑想を行っている修行者の精神状態は、われわれの日常的な状態とはかなり異なり、一種のトランスに入っていると思います。ドラッグによるトリップにも似たものかもしれません。したがって、「想像を絶する」ようなイメージの世界が繰り広げられていたと思います。仏教ではそのような状態を「三昧」と呼びます。

これまでに出てきた文献は、どれも戒律のことと、それに反すること、反した場合のことばかりで、何が楽しくてそんな戒律を守るのか、そんな戒律を定めたのか、と感じていました。今回の観仏教典は、頭の中で直接救いに向かっているように感じました。演習で用いた『聖☆お兄さん』のブッダの昼寝のシーンは、一話の最初の「昼寝してるだけだから！」「ほっとけ！」のシーンですか？ 先生はこの作品をどのように評価してらっしゃいますか？ テントウムシの越冬の話は、この授業で過去最高にゾッとしました。昔、中学生のころ、図書室のカーテンを閉めようとつかんだところ・・・という記憶を思い出しました。仏の、百億の微生物のようなむらがるものたちは、確かに気色悪いです。ここまで書くと、むしろシャカに失礼な気がします。仏教は、愛欲や死から離れるというより、その中で息づいているように感じました。

律を定めたのは、もちろん、それを楽しむためではありません。悟りを得るためのもっとも適切な生活規範を、時間をかけて決めていったようです。逆に、そのような大まじめに定めた律も、視点を変えて読むと、滑稽に感じることがしばしばなのです。『聖☆お兄さん』の「昼寝してるだけだから！」「ほっとけ！」は、全然覚えていませんでした。授業で取り上げた『観仏三昧海経』の昼寝のシーンを作者が知っていたら、おそらくある種の敗北感に駆られたでしょう。『聖☆お兄さん』はパロディーとしてはよくできていると思いますが、仏教そのものの持つおもしろさから見れば、レベルが低いなぁというのが率直な感想です。第1巻しかまだ読んでいませんが。

釈迦が衣をひらいて自身の性器を見せる、という描写で、春先によくニュースできく「裸にコートを着た変質者」みたいなものを思い浮かべました。そういった人々にはわいせつ物を女性に見せたいという願望があるとききますが、書き手にもそういった願望があるように思えました。

おそらくあったのでしょう。経典というのが男性視点の作品であることが、ここからもよくわかります。もっとも、教科書や授業で取り上げたのは、見せることのわいせつさよりも、その形態の変化がもたらすグロテスクさや滑稽感です。

巨根といえば、道鏡が思い浮かぶが、その伝説もシャカの馬陰蔵相を意識して書かれているのかもしれないと思った。もっとも、道鏡のそれは常に巨大で平満ではなかったようだが。

道鏡については、称徳天皇（舒明天皇が重祖しています）とのエピソードが有名ですし、悪役として定着しているのですが、最近は再評価の兆しも見えます。天皇の護持僧として宗教的な側面から政治を支え、平安時代の密教僧の先駆的な存在とも言われます。歴史の世界における悪役は、えてして、後世の人々の意図的なイメージ操作によるものです。巨根の伝説はそのような操作の一つでしょう。

性器に無数の顔は自分も気持ち悪いと感じました。百億という数を並べられると、なんだか子どものケンカみたいに聞こえます。（もっともそれを実現させたからすごいんだぞ！ということなのでしょうが。）なんだか「ありがたい」を通りこして、「ごめんなさい」と言いたくなります。ただ、結局最後は「無」なんだということを言いたいなら、わざわざ自分の素晴らしい性器を露出したり、象や馬の性器を見せることない気もします。よく遊女はあれで納得したなあ、と少し不思議に思いました。

まぁ、所詮、おとぎ話ですから・・・。「ありがたい」を通りこして「ごめんなさい」というのは、なかなか絶妙ですね。

今回釈迦の男性器の描写があまりにも丁寧で、シュールというかグロテスクというか・・・。とにかく面白かったです。本当に釈迦をほめる気があるのかなと思いました。釈迦も釈迦でやっていることが幼くて人間くささを感じました。あとそういえば、女性器には焦点が当たらないんですね。これも男性と女性の違いなんでしょうか。

これも経典作者の男性的視点からでしょう。誇示すべきものは自分自身の男性器で、女性器を含め女性は厭うべき対象として位置づけられています（もちろん、大いに関心は持っていることの裏返しでしょうが）。そこでは釈迦は経典作者が自分を投影した理想?の男性でしかありません。紹介した物語は、いずれも荒唐無稽で、仏典の常識を越えているのがおもしろく、それだけで興味深いのですが、仏教学的には、それぞれが下敷きにした仏典があり、それをどのように焼き直しているかを明らかにしたいとも思っています。

釈迦の馬陰蔵相の記述は、グロテスクだとおっしゃっていましたが、私もそう思います。しかし、経典の編者たちはありがたいもの、すばらしいものとして考えているそうですが、やはり、当時の仏教徒も、同様にすばらしいものと感じたのでしょうか。信仰している人にとっては神聖なものに感じられるものは、少し離れたところから客観的にながめる立場の人間にとっては、グロテスクに感じられることがあり、それはしばしば、「いきすぎた神聖性の表現」によってもたらされる気がします。

そこがポイントだと思います。大まじめにやっていることも、一歩離れてみると、グロテスクであり、それ以上に滑稽です。しかし、宗教というのは客観的に見て信仰するようなものではなく、まわりが何も見えなくなることでのめり込むものでしょう。

仏教系の幼稚園に通っていたとき、悪いことを子供がしないよう、地獄絵をまとめたVHSを見せられたことを思い出しました。当時は泣くほど怖くてしかたありませんでしたが、今見ても生々しく感じてとてもおぞましくてゾクゾクします・・・。

それはよくありません。トラウマになります。もし機会があれば、そのような教育はやめるように幼稚園の先生にお伝えください。もっとも、前回の配付資料に書いたように、その反動で仏教学者や仏教美術史家になるのであれば、それはそれですばらしいことなのですが。

お釈迦様のことを不能男だって言って、不能男だから空とか言ってるんでしょ！とか言っちゃう女の人って強いなって思いました。そんな話したら、はしたないとか言われちゃいようだけど、侍女が普通に奥さんの前で心配したりしてるのって、なんか開放的だなって思いました。結局性交しても満足は得られないんだよってことなんですかね？　お釈迦さん、性交できなさそうでした。アナンとナンダなんですね。アーナンダーじゃないんですね。

アーナンダで正しいのですが、漢訳経典では阿難となります。ナンダは別の弟子の名前で難陀と訳します。

“老”というのは、多くの人にとって畏怖の対象だと思います。そのため、現代においてアンチエイジングというのが流行しています。実年齢が60歳なのに、まったくその年齢に見えない人は、特に女性の場合、「きれいだな」と思うが、私には「不気味」にも感じてしまいます。不老は憧れではあるけど、実際、そのような人がいると、人間らしくなく不気味です。痛々しい若作りはこっけいであるようにも思えるので、このこともエロスさとグロテスクさに少しは関係しているのかなとふと思いました。

たしかに、老醜という言葉はありますが、その反対の美しい老いという言葉は思い浮かびません。しかし、美術作品では老人を美しく描いたものはかなりあると思います。その場合、もちろん若々しく描かれているのではなく、風格や哀愁などを感じさせるように描いているようです。日本の美術ではあまり思いつきませんが、ヨーロッパ絵画ではレンブラントの晩年の自画像などが思い浮かびます。老人の図像学のようなテーマで、どのように描けば醜くなり、どのように描けば美しくなるか、調べてみるとおもしろいかもしれません。

1月11日の授業へのコメントと回答

「火」というのは、どの神話でもかなり重要な要素として扱われているのだな、と思いました。日本神話ではイザナミが火の神を産んだことで黄泉の国へ行ってしまいますし、ギリシャ神話ではプロメテウスが火を人間に与えることでゼウスの怒りをかっていました。今回の火の起こし方やアグニの話など、火に対するそれぞれのイメージが出ていて面白いなと思いました。

プロメテウス神話はインド＝ヨーロッパ語族の伝える火の起源に関する神話のひとつで、授業で紹介したウルヴァーシーとプルーラヴァスの物語とも関連があるそうです。火を中心にさまざまな神話を調べると、おもしろいでしょうね。授業では触れませんでしたが、インドの神話の場合、火をもたらしたのが母方の親族であることも重要です。古代アーリア人は典型的な父系社会なのですが、それにもかかわらず、儀式で最も重要な役割を果たす火が、父方ではなく母方に起源を持つことがポイントです。

かつて権威のあったものが、のちに低く見られるというのは、人間全般に当てはまるというのには納得してしまいました。インドラの落ち具合はすさまじいものだと思いました。

授業の中では軽く触れただけですが、私はこの考え方にかなり興味をひかれます。権威を失ったものに、人々は容赦なく差別や虐待を行います。揶揄の対象ともなります。この考え方の典型が、ユダヤ人差別です。歴史の教科書などには、ユダヤ人が金貸しなどを行い、恨みを買ったため、ヨーロッパでは差別されたとありますが、実際にユダヤ人への差別や虐待がひどくなったのは、すでにそれだけの経済力や社会的地位を失ったあとです。ナチズムはその末期的な段階なのです。はじめから力がないものには、人は無関心です。かつて力があったからこそ、その凋落ぶりが人々の攻撃心に拍車をかけるのです。このことを私はハナ・アーレントの『全体主義の起源』（みすず書房）で知りました。卑近なところでは、週刊誌などがよく取り上げる「あの人は今」といった特集でしょう。

異類婚と聞くと、「鶴の恩返し」を思い出します。他にも、トヨタマヒメという鮫の姿の女神の話もあったと思います。天女伝説もそうかは知りませんが、「見ちゃダメ」などとタブーを設けて、一方がそれを破ることで別れる、という話の流れが多いですね。箸墓古墳だったかにもそんな伝説があったような気がします。雷の異名の稲妻なども生産と関係がある名称で興味深いです。多分関係は無いでしょうが。体中に眼ができると、風なんかで砂が巻き上げられるとしみる上、何かにぶつかると非常に痛いので、大変そうですね。

箸墓古墳は蛇と人との異類婚ですね。日本書紀にあるようです。異類婚の物語は日本中にさまざまなものがあるようで、私の郷里（滋賀）にも世々開長者（せせらぎちょうじゃ）という長者と、虎御前（とらごぜん）という姫の物語が伝えられています（この場合も姫が蛇）。蛇は一角仙の物語でも重要な役割を果たしたので、どこかでつながりができないか

と考えたのですが、うまくできませんでした。「千の目」はたしかにたいへんですね。それでも、教科書で紹介したように、「千の女陰」よりは、ましのような気がします。あまり比較してもしょうがないのですが。

雷は面白い性質だと改めて思った。水（雨）を伴い火を起こし、眼に見えるのに触れることができず、仮に触れられた者には死をもたらすという、考えてみれば何とも不思議なものだと感じた。日本神話においても、イザナギがイザナミに追われて逃げる場面で使われていたし、異界と現世、男と女をつなぐものとして見なされていたのだろうか。と考えると、男女というのは異界同士の関係であり、基本的には相容れないが、一時的につながりを持ち、その問いに生命（水・火）が産まれると深読みもできるかもしれない。考えてみれば男女平等が叫ばれるのは、そうでないことを物語っている訳だし、それぞれの役割や理想像から見ても、男女は相容れず別々の生き物のようにさえ見ることができる。

たしかにそうですね。神話学的には、天が男で地が女、それをつなぐのが雷という位置づけですが、対立するものは天と地以外にも、現世と異界というとらえ方も可能ですね。人間の考え方として広く見られる二項対立も、男と女がそのもっとも基本にあるのかもしれません。一方の雷はこの後、金剛杵として具体化し、さらにそれを持物として持つ帝釈天や普賢へとつながっていきます。もともとは境界上の存在で、男性にも女性にも属さなかった雷が、男性の専有物となり、さらには男性そのものの象徴（とくに性的な）へと変化を遂げるのも、興味深いところです。

ウルヴァシーが雷を出したことは、離れているもの（天と地）を途中でつなぎ完成させるものであると言われ、つまり雷を出した＝精液を出した、という風に解釈しました。そして気になったことは、雷を出した後にウルヴァシーが姿を消してしまったことでした。そして後ろの方を読むと、「わが身は暁染めし紅の如く消えて去りしものなれば」と書いてありました。ただ姿を消すのにこのような表現をするのは意味深でした。これはつまり、ウルヴァシーがオーガズムを感じたという風に解釈するのはどうなんでしょうか。火照ったことをこのように表現するならとても納得がいくのですが・・・。

そこまでは私は考えませんでしたが、たしかに「暁染めし紅」という表現は、そのような解釈も可能かもしれません。しかし、そこまで深く考えなくても、暁は太陽の出現と共に姿を消すため、暁のイメージそのものが、はかないものとしてとらえられているからではないでしょうか。ちなみに、ヴェーダの神々の中にもウシャスという暁の女神がいますが、太陽の神スーリヤの先に現れ、スーリヤの出現と共に姿を消すことが、神話の中でうたわれています。

1月18日の授業へのコメントと回答

今回は象が出てきましたが、インドの人々にとって身近な動物というだけでなく、その大きさや草食でありながらも強い所、見た目などなど、神秘的だったのだろうな、と思いました。白象というのが出てきましたが、実際にいるのでしょうか？　白という色は何かイミがあるのですか？　スライドの時、先生も少しおっしゃられていましたが、象ってなにか、妙に色っぽいですよね…。

この授業の中では象がかなり重要な位置を占めています。地上の動物の中で最も巨大で、その形態が特異であることから、象は特別な動物だと思います。とりわけ、鼻の形態が性的なイメージを連想させるようです。最後の方のコメントにもあるように、「クレヨンしんちゃん」の世界です。古くは「ガキデカ」というマンガでも、よく似たコントが登場しました。それに加えて、オスの象の性器は普段は隠れていますが、とても巨大で、発情期や交尾の時には地面につくほどだということです。授業でしつこく言及していた「七支」は、普段から象の姿を見る機会があったインド人にとって、一般的な理解だったのかもしれません。白象はアルビノでしょう。アルビノの象もいるようです。

仏が“右わき”から入るというのが気になりました。なぜあえて陰部ではなかったのでしょうか。マリアの受胎告知も同様、「エロスとグロテスク」的部分は避けたのでしょうか。3頭の象の顔がとても怖いです。もはや象ではなく別の生き物のようでした。

拓胎霊夢は授業でしばしば登場しますが、右わきから入ることの意味は、私自身もよくわかっていません。釈迦が生まれるときに、右わきから生まれることが先にあり、その関係で、同じところから入ったのかなぁと思っていますが、その程度の理解です。シーザーのような異常出産（たとえば、帝王切開）は、英雄の誕生にしばしば見られ、釈迦も一種の英雄だったとも考えています。シェークスピアの「マクベス」にも、最後のシーンで出てきますよね。普賢を描いた仏画には、ユニークな象がたくさん登場します。象の図像学のような研究もおもしろいと思います。日本人はもちろん、象を見たことがないので、何とかそれらしく描いているのがおもしろいところです。たしかに怖いのもありますが、それも見どころでしょう。

シャカである白象がマヤ夫人に入る時、雄々しく登場してこじ開けて入っていく所はたしかに性行為的な表現だなと思いました。母と子ということを考えると近親相姦を表しているようにも感じられますが、それよりも男性性の強調のように思えます（子としてよりも）。ところで江口の君は能で西行が宿をかしてくれというのを断った遊女だったような気がします（記憶があいまいですが）。

『ジャータカ』の文章を紹介しましたが、文章を素直に読むと、かなり露骨な表現と思い、取り上げました。私は一種の近親相姦かなと思っていました。その後、摩耶夫人が死んだことも、マザコン的な傾向に拍車をかけたと思っています。摩耶夫人のために説法をしに天界に赴き、地上に帰還した「三道宝階降下」や、涅槃の直前に摩耶夫人が地上に降りてくるシーンなどが、仏伝美術で取り上げられますが、父親の浄飯王では、このようなエピソードはひとつもありません。母と子（とくに息子）とのつながりは、強いのでしょう。私の別の著作『インド密教の仏たち』では、第3章でこのよ

うなテーマをインドの神々を通して考察しています。江口の君はご指摘のとおりです。能はよく知らないのですが、そこでも江口に君は普賢の化身として登場するのではないでしょうか。江戸時代の浮世絵や錦絵では、美女を描くためにこのテーマが取り上げられることが多かったようです。

右脇から象が入る場面を想像してみると、瓢箪にすいこまれるように入っていくならまだ良いのですが、ズルッズルッと入っていくとすると、かなり恐ろしい場面のように感じました。スプラッタです。No.2　の漢文の方が淫猥な雰囲気に思いました。それにしても、なぜ象の牙は六本なのでしょうか。数に意味があるのかが気になります。7+6＝13で7も13も素数だ、とか考えてみても意味が分かりません。（第一、7の次の素数は11ですし）。色が白いのは、イチジクとかと同じようなイメージなのでしょうか。観経類等で、「～の中に～があり、またその中に～が…」というような表現が多用されていますが、非常にフラクタル的です。

経典には実際にわきの下から入っていく描写がないので残念ですが、どのように入ったのでしょうね。授業で紹介した摩耶夫人の「この上ない快楽」というのは、それの代わりの情報だと思いますが、それを快楽と呼んでいることが気になります。実はこのことは、私が学生のころに、美術史の宮治昭先生からお聞きしたことです。この他にも宮治先生からは、美やエロスについて、いろいろためになる情報をお聞きしました。すでに30年近く前のことになりますが・・・。

普賢菩薩が乗っている象が小さく（見え）てかわいいと思いました。実際にはそこまで真っ白な象はいないと思いますが、仏教のぶっとんだ世界観の中では現実味があると感じました。野生の象は凶暴で危険な存在だと聞きましたが、群れでいる姿はなんだかなごみます。鬼子母神のように、怖いけど子供を守ってくれる存在を見ると、なんとなくモンスターペアレントを思い出します。

鬼子母神の「生命を奪う神が、生命をもたらす神」というアンビヴァレントなとらえ方は、この授業全体のテーマともつながります。生と死がセットになっていたり、簡単に逆転するという点です。このことは、『インド密教の仏たち』の第7章のテーマで、そこでは鬼子母神も紹介しています。今回の授業や教科書は、このテーマをさらに発展させたものですが、単に相反するものは、究極的には一致するという見方だけではなく、それが第三の局面（たとえば、滑稽）に転換することを意識しています。モンスターペアレントというとらえ方は、今まで思いつきませんでしたが、そういうとらえ方も可能ですね。

鬼子母神が元々子どもを殺す神だったというのが興味深いです。そういえば普賢菩薩の像の足跡の例で出てきたもののけ姫のシシ神も命を与えたり奪ったりする力を持った神でした。歩く時のシーンはシシ神に踏まれた植物が一気に生長し、そして枯れていったことから植物は過剰に生命力を与えられそして死に至ったのかと思いました。

そうですか。私の「もののけ姫」の記憶はおぼろげなので、単に生命が誕生しただけかと思っていましたが、枯れるところまで含まれていたのですか。そうすると、たしかに過剰な生が死をももたらすということになるのですね（教科書第5章のテーマです）。ジブリ恐るべしといった感じです。

何で象がひわいかよく分かりませんでしたが、象自体が男性性器の象徴という解釈なのかなぁとクレヨンしんちゃんを見て思いました。もしそうであれば、シャカは「子ども」でありながら「男性」であり、まるで母親に自分で自分を産

ませているように見えます。キリストもそうですが、父親の影がうすく、強調されるのは「母」と「子」のつながりですが、「子」＝「象」＝「男性」というつながりによって、「男」+「女」→「子」でありながら、聖性も維持したのかなぁと感じました。そう考えると、前は男女は異質だと思いましたが、母子のつながりから、異質でありながら対立するのではなく、つながり、一体化する、一体であったものなのだろうか。あと金剛杵はどうやって戦うのか、ちょっとよく分かりません。撲殺?

象が卑猥かどうかは、たしかに見る者の意識によるでしょうね。童謡の「ぞうさん」を聞いても、卑猥でも何でもありませんから（しかし、深読みすると、この童謡も、どうして「母さん」は登場するのに、「父さん」はいないのでしょうね）。母と子、さらに聖性についての考察は、授業の核心に触れているような感じです。「異質でありながら一体」という表現もいいですね。人間の思考には、このような反対概念を同じものとしてとらえるというパターンがあるようです。とくにそれが顕著なのが宗教のようです。エリアーデはそれを「反対物の一致」と呼んでいます。皆さんに書いてもらうレポートにも、このようなテーマを考えています。金剛杵の本来の形態については、東北大学の後藤先生が考察しています。先にとがったものがたくさんついた棍棒のようなもので、それを振り回して攻撃するかなり恐ろしい武器だったようです。けっして、雷のようなとらえどころのないものはなかったようです。

1月25日の授業へのコメントと回答

今回最も印象的だったのが、アタルヴァヴェーダの「渇望を羽～貫かしめよ」という呪文でした。なんだか恋愛というものをニヒルに表しているんですね。ミトゥナ像を見て、てっきりインドには「愛」という概念があったのだとばかり思っていたのですが、そうでもないのでしょうか？ それともアタルヴァヴェーダが特殊な例なのでしょうか？ そういえば、日本も近代まで“love”に相当する言葉がなく、明治の文豪は訳すのに苦労したという話をよく聞きますが。

私も『アタルヴァ・ヴェーダ』のこのフレーズは気に入っています。恋愛とはそういうものなのです。「愛」という言葉自体は、古くから日本にありましたが、おもに仏教用語として用いられてきたようです。その場合、すばらしいものとかではなく、「愛着」「渇愛」などのように、人間を輪廻に駆り立てるもの、すなわち否定されるべきものとしてとらえられてきたようです。女の子の名前で人気が高いように、今の人は「愛」が大好きですが、このような「愛」至上主義を見たら、昔の人は腰を抜かすでしょう。ちなみに、サンスクリット語で「愛する」を意味するsnihという動詞は、「くっつく」というのが語源です。接着剤のようにべたべたしたイメージが、インドの「愛」なのです。

西洋絵画で、死、時を司る神が老人の姿で表現されるのは納得できるのだが、愛をもたらす神が子どもの姿で表されるのは、あらためて考えると不思議な感じがする。愛、愛欲は自分の中ではあまり少年とは結びつかない。むしろ、青年とか美女とかのほうが、愛を司っていそうなイメージがある。また、愛染明王が新しい仏らしい、と知って驚いた。これを最初に作品化した人たちは、宗教知識だけでなく、かなりの芸術的センスを持っていると思う。

愛の結果生まれるのが子どもですから、やはり生殖のイメージでしょうか。あるいは、子どもの持つ中性性もあるかもしれません。子どもというのは男性でも女性でもないのです。それとともに、ヴィーナスとエロスのように、美女と少年という結びつきも重要かと思います。ヤクシニーとガナがそうでしたし、今回の授業で取り上げる弁才天や吒枳尼天にも、少年（童子）が頻繁に登場します。

今日の、ドロ人形に矢を刺すことが、ワラ人形にクギを刺す行為と似ているという話を聞いて、貴船神社の話を思い出しました。ある女の人が、心変わりした恋人を殺すために丑の刻参りをする話です。（能の「鉄輪」のもとになっています）「ほれさせる」のが「自分のものにする」行為なら、「殺す」のは、自分のものにならないかわりに誰のものにもならない、という行為のような気がしました。

ストーカー的ですね。私も「愛すること」と「殺すこと」あるいは「死ぬこと」の近さを、教科書を書くときにはつねに意識していました。わら人形に五寸釘が密教儀礼に由来することは、以前、結界法を調べたときに少し書いています。20年ほど前の論文ですが、問題意識は変わらないようです。

人形に働きかけることが対象に影響を与えるということだが、人形と対象とのリンクにどのような理屈をつけるのだろうか。物的相似なのか、名称の利用なのか。矢と心臓、刺すもの、刺されるもの…性交のイメージが強い。痛みもあるだろうし、愛欲としての前者、愛欲を喚起するにもかかわらず支配される後者、分けづらいものである。

弓矢を愛欲と結びつけるのは、性交のイメージと殺すことのイメージが重なっているのでしょう。人形のようなものを作って、それを呪術で用いることは、世界中に見られますが、それが愛欲と結びついていることがポイントだと思います。密教経典では名札を書いて付けるという方法もあったはずです。別の話ですが、中世ヨーロッパでは、処刑場に生えている植物（マンダラゲとか）が、惚れ薬や、その逆の恋人を忘れるための薬になるという信仰があったそうです（ヴェルディのオペラ『仮面舞踏会』などにでてきます）。これも、死と愛の近さを表すようです。

今回の画像の1つで目隠しをしているキューピッドがいましたが、弓矢を射るとされているにもかかわらず、目隠しをしている意図は何なのかが疑問に思いました。

目隠ししてるのは、愛が人智や分別を超えたところにあるからです。誰かを好きになるのは、理屈ではありませんから。そうですよね。

今回は、バレンタインデーやキューピットといったかわいい話から始まり、（ハートに矢が刺さっているイラスト）のマークが黒板に描かれた。普段「心を射止めた」という意味でロマンティックなイメージを持っていたが、今回、それが粉々に崩れた。確かに心臓に矢がささっていれば死を意味するわけだが、このマークからそのような残酷さを感じなかったのはなぜだろうか。また、アタルヴァ・ヴェーダの儀礼では、人型の心臓に矢を打つという話が出た途端、五寸くぎとわら人形で呪い殺すイメージが浮かんだ。すぐ、先生から呪殺の話が出て、「やはり！」と思った。知らなければ、ロマンティックだったのに…知識が増えることは良いことか悪いことか…。考えさせられる授業だった。

ロマンティックなイメージはそのままでもいいと思いますが、その背後の重層的なイメージも、知るとおもしろいのではないでしょうか。私は基本的に、知識が増えることはいいことだと思います。それによって、見えないものが見えてくることが多いのですから。

「愛の寓意」は宮下先生の授業で紹介されたことがあります。その時は、それぞれの登場人物が象徴しているものだけに注目していました。しかし、この授業からの視点で見るとエロスとヴィーナス、うしろの少女を見てエロスとグロテスクの同居だなぁと思いました。同じ絵でも様々な見方ができておもしろいです。

ブロンツィーノの「愛の寓意」は、ヨーロッパの寓意画の中でも人気が高い作品で、解釈もいろいろあるようです。宮下先生のご説明は、おそらく正統的なものだったと思いますが、エロスとグロテスク的な要素も盛りだくさんだと思います。後ろの少女は、顔は可愛いのですが、下半身がかなりグロイですね。でも、よく見続けていると、顔もけっこう不気味です。美しさと不気味さは同居するようです。

女性の受講者の多くが感じたことを代弁すれば、「女性の気持ちを射止めるための呪文」があるなら、「男性を射止める呪文」を教えて！！と思ったはずです。それにしても、“日本的”だと思っていたわら人形＆五寸釘が密教の呪殺の方法を受けていたという指摘は面白かったです。ただし、私がわら人形＆五寸釘と一緒にイメージするのは、恨みの念に取りつかれた女性で、『アタルヴァ・ヴェーダ』で男性が矢を射るのとは対照的に見えました。追記：個人的には三つの頭がある天川弁才天は「カワイイ」と思いました。

天川弁才天が「カワイイ」と思えるのは、すごいです。個人差があると思いますが、私はこれはだめです。女性の受講生云々はおっしゃるとおりです。受講生の半分以上は女性なので、そういう資料も出すとよかったでしょうね。辻先生訳の『アタルヴァ・ヴェーダ』を見てみたら、「夫を得るための呪文」とか「男子の愛を得るための呪文」「男子に熱烈な

愛情を起こさしむるための呪文」などもちゃんとありました（弓矢は残念ながら登場しませんが）。中には「男子を不能となすための呪文」なんていうのもありました（怖いですね）。『アタルヴァ・ヴェーダ』を見ていると、人間が考えることや望むことは、何千年たっても、たいして変わらないことがよくわかります。「頭髪の生長を増進させるための呪文」とか、「性欲を増進させるために呪文」などもありました。週刊誌や新聞の広告と変わらないですね。